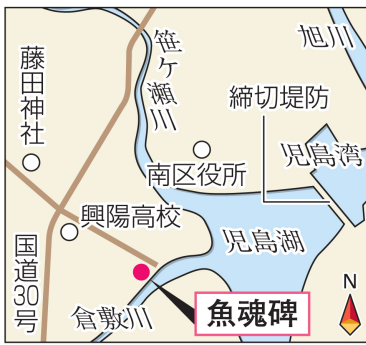


うちの モノ 語り



岡山市南部の児島湖に注ぎ込む倉敷川の支流、妹尾川沿い。産業廃棄物中間処理施設（約1・17畝）の一角に真つ赤な鳥居が見える。近くにある藤田神社（同市南区藤田）の分社・藤神社だ。傍らの「魚魂碑」は、かつて地元の特産物だったウナギを供養するために建てられた。碑は高さ約1・4m、幅約0・3mの花こう岩製で、正面に碑名が彫られている。1959年、地域でウナギの養殖に取り組んでいた岡山県養鰻振興会（現在は解散）が建立した。

276

「青江ウナギ」の魚魂碑

（岡山市南区藤田）

「魚魂碑は下関のフグを祭るものなど各地にあるが、それだけ地域でウナギが大切にされていたのだろう」と藤田神社の今井伸宣司（49）＝同所。歴史をひもとくと、江戸時代



ウナギを供養するため建てられた魚魂碑と近藤会長（右）、今井宮司

漁、養殖の歴史伝える

も盛んで、ウナギは地元漁師の大きな収入源だった。51年、塩害対策などを目的に締切堤防を造成して、児島湾西側を淡水化する工事が始まった。地元漁師らでつくる児島湾淡水漁業協同組合は、環境変化による漁獲量減少を危惧して57年に県の試験場を誘致。ウナギの養殖場もあり、敷地内に碑が建てられた。当時、藤田地区の農家では水田を養魚池にしたウナギの養殖が盛んだったという。地元の塩出重臣さん（88）は「この辺りは用水路にもウナギがたくさんいた。試験場ができ、少なくとも5人の友人が自宅で養殖を始めたのを覚えている。環境の変化で今はいなくなつたが、生活と密接に関わっていた」と振り返る。同組合は試験場を県から購入してウナギを養殖していたが、飼育コストが高く81年に閉鎖。その後、碑を撤去しない条件で、土地と建物を産業廃棄物処理業の藤クリーンに貸し付けた。同社は碑の近くに鉄板を設け、粉じんで汚

×モ 青江ウナギは「青江のアオ」とも呼ばれ、最高級品として知られた。1889（明治22）年に大阪であった品評会では味、脂の乗り、風味で「全国一」の評価を得たという。藩政時代、青江（現岡山市北区青江）一帯の漁師のみに捕ることが許されたのが名前の由来とされる。現在は、海水と淡水が混じる児島湾の汽水域で捕れ、背が緑がかった青色のウナギは「青ウナギ」として珍重されている。

るのを防いでいたが施設の増設で徐々に保護が難しくなつたため、2016年8月、同神社の祈禱を受けた上で、碑を駐車場横に移設した。分社は自由に参拝できるよう地域に開放。碑の隣には、児島湾干拓やウナギ漁の歴史を紹介するパネルも設置した。同社は今後も碑の存在を地域に知ってもらう顕彰活動を続ける予定で、近藤義会長（70）は「地域で大切にされていたウナギ漁や養殖の歴史が忘れ去られることのないよう、碑を守り続けていきたい」と話している。（山本貴之）

（C）山陽新聞社 無断複製・転載を禁じます。